

京町家通信

KYOMACHIYA PRESS
vol.111

京町家通信 第111号 2017年3月1日発行
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
一般社団法人 京町家作事組
京町家友の会
京町家情報センター
ホームページ<http://www.kyomachiya.net/>

巻頭言 ● 「町家の日」

今年から、3月8日は「町家の日」と決まった。

昨年早々に「町家の日」を決めようという意見が京町家情報センターからあがった。

「なんのために?」「いつが町家の日?」「決めて何をするの?」「町家の日ってなに?」いろんな疑問がでてきて、様々な議論が積み上げられた。加えて、情報センターは京都タワーのライトアップも計画中であり、「町家の日」はそれなりに盛り上がっている。「ライトアップ?」「町家は何色?」「正直、京都タワーの色なんかわからへんし、きがつかへんのとちがうやろか」、「どんなふうに周知するの?」

「町家の日」を巡っては今もいろんな意見があり、落ち着くまでにはしばらくかかりそうではあるが、この議論がきっと「町家の日」の存在を広めていってくれるだろうと考えている。

何かの日を制定するのには手続きが必要で、一般社団法人日本記念日協会に申請をし、認められて「町家の日」が制定された。ちなみにインターネットで3月8日を調べてみると、「国際女性の日」、「みつばちの日」、「エスカレーターの日」、「みやげの日」、「ビールサーバーの日」、「さばの日」、「さやえんどうの日」、「サワークリームの日」、「鯖すしの日」、「赤ちゃん & こどもカットの日」と様々な記念日が並んでいる。3と8の語呂合わせがけっこう多く、マーチ (march 3月) と8 (ヤ) という町家の日の理由もここからである。

この日を記念の日として、さて、何をするのだろうか? 「国際女性の日」は歴史的な記念日で、1904年のこの日にニューヨークの女性労働者が参政権を求めて集会を開いたことが理由に上がっていることで、女性の権利を考える日ということだろう。食品はやはり語呂合わせが多く、食品の普及啓発、しっかりと食べてもらおうということが珠になるのだろうかと思うが、町家はどうするのか?

今年の「町家の日」はまず知ってもらうことが必要であるため、様々な催しを企画している。もちろん場所は町家である。町家に関するセミナーあり、お茶会あり、コンサートあ

り、いろんな角度から町家を見てもらおうというもくろみである。近年、京都の町家で何かをするということでは、飲食店はあたりまえ、体験型の施設も増え、様々な業種でも町家改造の店舗は増えている。路地の中には宿泊施設があるというのは、まちなかでは普通のこととなっているのもここ数年の大きな動きであり、町家の動向である。が、私たちが京町家の保全再生として長年考え続け、実践していることとはかなりかけ離れている実態があることを、再確認しなければいけないだろうと、この日の意味を考えながら思っている。

京町家の保全再生の意味はやはり、その町家が健全な形で継承されるということが大きな目的であり、筋である。私たちはそれを大切にしながら25年という年月を走り続けている。明治から昭和初期までに建てられた町家という建築に新しい暮らしをどのようにして添わせることができるのか、明治の建物に平成の暮らしをなじませるためには何が必要かを様々な角度から考え続けている。まちなかに建てられた都市型住宅としての町家に詰まっている技術者の創意と工夫、生活者の暮らしの中から生まれてきた知恵をきちんと引き継ぎながら、今の次代を生きる町家として継承することを3月8日の大きなテーマとしてあげたい。見かけは町家、中にはいればマンションの部屋と変わらないという“なんちゃって町家”が増え続けているのを見るにつけ、この「町家の日」を大切に育てていきたいと思っている。

昨年、これ以上町家を壊さないようにしたいという要望書を京都市に提出し、今年にはそれが具体的な形で進むことを切望しているが、壊さないためには健全な保全再生が重要となる。大切な住まいと暮らしを次世代に贈り届けるためには、今一度「京町家」について深く考える機会を持ちたいと思う。3月8日の「町家の日」がその日になることはとてもありがたいことだと思っている。

<小島 富佐江 (京町家再生研究会理事長)>

論考 ● 地域景観づくり協議会の現状—明倫学区の取り組み その2

以前論考でもとりあげた明倫学区の取り組みが新たな展開を迎えている。地域景観づくり協議会の活動が始まって2年、活動の成果とともに制度の問題も明らかになってきた。今回は地域景観づくり協議会の現状と、現在のまちなかの変化を踏まえた今後の再生研の取り組みについて考えてみたい。

京都市の地域景観づくり協議会制度は2011年4月に制定された。認定を受けた団体が、地域特有の自然、歴史、文化を背景とした景観を地域の特色として打ち出した「地域景観づくり計画書」を策定する。新築や新しい看板の設置など、対象となる事業が発生する場合には必ず住民と意見交換会を行わなければならない。意見交換会は地域のあり方を伝え、業者と共有する機会として設けられる。地域住民の思いや方向性を共有できる主体的な制度といえるが、土地建物所有者や事業者に対する強制力はない。

現在、京都市内では8つの団体が認定されており、9つ目の認定も予定されている。まちなかで学区を主体としたもの、観光客を多く迎える地域ではなりわいに直結したところ、長年のまちづくり活動の中で一つの到達点としてとらえられているところなどもあり、地域の事情により、対象となる範囲も計画の内容も認定を受ける組織もさまざまである。

明倫学区ではまちづくり委員会が主体となり、学区が認定を受けている。この2年間に29件の相談を受けて、意見交換会を開催した(2017年2月末現在)。意見交換会を通じて住民が感じているまちなかの変化をまとめておこう。

● ホテルの新築、改築が増えている

伊勢長の跡地で建設中の大規模ホテルのをはじめ、新築だけではなく、ビルの改修など次々と案件が出てきている。規模もさまざまである。景観はともかく、運営面での課題が多い。工事中の車両通行、リネンなどのサービス車両やタクシー待ちなど、通学路でもある通りが車であふれる状況に住民は辟易としている。敷地内に駐車場を設ける、サービス車両の駐車時間を調整するなどを協議会としては必ず要請している。

● ゲストハウス

簡易宿泊所への転用も目立つ。路地奥の長屋をすべて宿所にするケースも出てきた。それまで空き家であったものが整備され、活用されるという面ではよいことだが、見知らぬ人が路地という親密な空間に常時出入りするのは、周辺の居住環境に大きな変化、不安をもたらしている。また、管理者が常駐しないという計画が多く、特に夜間、非常時の対応がどのようになされるのか、住民は危機感を抱いている。ホテルの場合も同様だが、所有者、事業主、運営者が異なるケースが多く、責任の所在があいまいなまま計画が進んでいくことが多いのも不安材料の一つである。ある町内では、「祇園祭の山鉦町として管理者がいないのはあり得ない」と強く要請し、宿泊者がいるときは管理者が常駐する条件をとりつけた。基本的に運営関係は町内の問題となるが、協議会としても支援している。

● 町家の改装

店舗への改装については、てんこつにならないような改装、オリジナルのよさなどを再生研関係者と打ち合わせた上で計画するという事例もあり、ある程度協議会の効力が見られるところもある。ただし、前述の通り、路地奥長屋をまるごとゲストハウスに改修する場合など、デザイン性が優先されており、町家として健全な改修なのか、わからないものもある。

● 町並み

美しい理想的な町並みとして、「町家が連続する町並み」を住民が期待していることはある意味興味深い。これまではなんら規制ができなかったが、地域の特徴として「軒の連なる町並み」「壁面がデコボコしない連続性」を求めるなど、今後の建て替えによって、明倫学区の理想に近づけたいという住民の思いは切実だ。よいよりものを目指すという、現在の基準ではとりあげにくいことをこの制度では業者などに対して訴える機会となっている。

色など、京都市の基準を満たしている、という主張を業者はおこなうが、質感の面では配慮されていない。このときも町家の土壁が基準となり、落ち着いたもの、ピカピカしないものをお願いしている。

● 課題と展望

2016年12月11日、各協議会の団体が集まり、フォーラムを開催した。ここで明倫学区が求めたのは、「できるだけ早く相談してほしい、そして一緒に作っていく機会にしたい」ということだった。後から相談にいられたら、設計案に文句をいうだけになってしまう。しかも協議会には強制力がないから、業者が受け入れない場合、住民は無力を感じることも多い。

また、再生研の1月例会で訪れた西之町のように低層町家が連なり、古美術のまち、芸妓さんや舞妓さんが歩くまちとして住民自身が積極的にとりくんでいる組織もある。壁の色を厳しく設定したり、町内にさまざまな呼びかけをしたり、まとまって動いている組織もあることがわかった。

明倫学区としてはイメージを共有し、居住する空間として、これまでの生活を多くの人たちと一緒に続けていくためにルールブックを作成し、分かり合えるようにしようと努めている。川越のまちづくり規範をモデルにして、新しい人も観光客も地域を理解し、地域の意向をうけいれるような設計、企画を業者が意識的にできるように期待している。

もっともこれらの努力が徒労に終わらないように協議会制度の欠点を是正し、よりよりシステムにしていきたい、というのが京都市に望むところでもある。さらに市役所内で連携が取れてされておらず、情報が共有されていない状況も改善していただきたい。再生研としては、このような動きのなかで、町家が再評価され、住まう空間としての魅力を共有できるように協働していきたい。

＜丹羽 結花（京町家再生研究会 事務局）＞

報告◎ 子供達の為の土壁塗ワークショップ

昨年9月3日、4日、夏休み終わりの週末、京都と大阪のインターナショナルスクールに通う小学生の為に、京町家の土壁がどの様に作られているかを学ぶワークショップを、2日にかけて行った。通信 vol 109 に紹介した第8回「世界考古学会議京都大会」の催しの一環として、「アートと考古学」展覧会のアネックス会場である、中京区蛸薬師通り東入ルの元立誠小学校に於いて、地元作家の集う美術展の協力を得て、参加する小学生達の作品を飾る教室棟と講堂の間の中庭をお借りして開催した。展覧会場では、考古学遺物と現代アートや工芸、そして京町家の土壁をパネルや絵巻物、色土の見本や左官道具等と共に見ていただいたものの、町家の土壁をもう一步接近して具体的に使われる材料を手に取り、土をこねて塗り上げる工程を身体で直接的に経験して貰おうという試みだった。中庭にシートを敷き、柱や梁に見立てた木軸模型を2台置き、その木枠の中に貫を通し、割竹をワラ縄で編みつけ、そのしなやかに揺れる下地面に壁土をコテで塗りつけてゆく。参加した20人-30人の子供達や父母の皆さんは、普段見慣れない割竹やワラ縄の感触もさることながら、粘土にワラズサを混ぜ、およそ1ヶ月程発酵させた壁土のにおいや手触りに、格別の興味を抱いた様であった。ザワザワした切りスサを練り込んだネバネバと不定形の壁土をコテ板に取り、自分達の編んだ小舞下地に力一杯塗り付ける内に、だんだん土が下地に馴染み一体化し、時間と共に硬化し、しっかりした厚い壁になってゆく。この土壁が大工が刻んで架構した木の骨組と一体化して、地震に強い町家の構造が出来上がってゆくまでは、なかなか一気に想像もつかない事だろうが、人は一度覚えた事は必ず身体のだどこかに記憶として蓄積し、再び鮮やかに蘇る伝統文化の種として育んでゆくことと思われる。

このワークショップに突然飛び入りされた、大阪の工芸高校の先生と、わざわざインターネットでこのイベント情報を知り、関東から参加された2人の女性小学校教師は、土壁ワークショップを体験して、再び地元で再現したいと考え、指導者達の話を良く聞き、慣れない作業に熱心に取り組まれていたのが印象的だった。おそらく東京では珍しい京都東山の土と西山の竹という、地域の自然素材を用いた京町家の土壁塗ワークショップは、貴重な機会になった様である。

一方子供達は、土壁塗仕事の合間に、左官親方が持参した色付き泥団子に興味を抱き、作り方を教えてもらうや、この団子作りに集中し始めた。練り土を手に取り丸めてゆくと段々小球体が出来上がる。まんまるになるには、一生懸命丸めねばならないが、子供達は男女を問わず父母までもが熱中する。出来上がると乾いた土玉を水に浸し、自分の好きな赤や黄、じゅらくや青の色土にまぶして手のひらで磨き上げる。数十分の作業だが、これ程仕事に熱中する子供達は最近なか

なに見られない。最後に、親方から持って帰ってもいいよと言われた時の喜び様は、この上ないものだった。

私達、再生研、作事組メンバーの間では、常々京都市内の小学生を対象にこうした町家の作り方の基本的技術、大工、左官、瓦師達の仕事を紹介する機会を、是非作って行きたいと考えてきた。市内に大量に存続する京町家の構法、作法に於ける職人達の素晴らしい伝統技は、私達の住み続ける都市の生活環境の中に、大事な遺産として再生産され続ける価値あるものとして、世代を越えて伝えてゆきたいものである。

WAC-8は、京都での会議や「アートと考古学展」その他関連イベントを通じて、私達に京都の地中に埋蔵されている遺物群と、それらから学ぶ歴史、文化の大切さを教えると共に、現代社会の抱える問題として、考古遺物や過去の生活文化を捉えなおし、将来の展望に向けて次の世代の人々と共に、新しい価値を共有してゆく必要があることを明示してくれた。WAC-8 京都実行委員会の反省会に参加して、世界の参加者からのレポートや市民、観光客のアンケートの内容がとても好評だったらしく、「アートと考古学展」や、そこに参加した私達の京町家再生活動への注目、関心がより高まる事を期待したい。

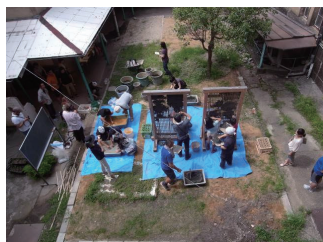
ところで、本年4月にオープンする四条町大船鉾町会所改修工事現場に於いても、地域の子供達を集めて、町家の土壁塗りワークショップがもよおされ、町内の皆様に喜んで頂いた様である。

将来、市の小学校の教育プログラムの一環に、京町家再生の技と知恵を学ぶ時間を、是非採用していただきたいものである。

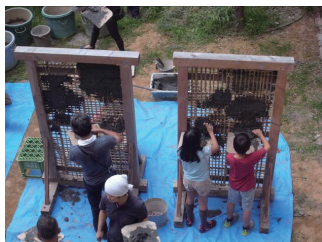
＜木下 龍一（京町家作事組 代表理事）＞



竹小舞を編む



ワークショップ全景



土を塗りつける



泥団子をつくる

歳時記 ◎旧暦で春を待つ

都市居住を年中行事からみてみよう、というテーマで町家住民の話を聞き始めたのが二十数年前。再生研が設立されて数年後のこと、まだまだ町家の暮らしは特別なもの、窮屈で伝統的なイメージが強く、一般的には認知されていなかった。町家の中身、暮らしの本質を知りたい、という素朴な疑問から始め、とっかかりとしてご紹介いただいたのが小島家だった。行事の折々、お伺いして参与観察をおこないながら、今は亡き小島正子さんからたくさんのお話を伺った。その後も多くの方々にお話を伺う機会を得、光や風の変化を感じながら暮らしている方々と豊かな時間、それまで過ごした長い時間を共有することができた。

私は北摂で長く育ってきたが、やはり京都はずいぶんと違うところだった。なかでも驚いたのは、2月の節分がきわめて重要な行事であること、そしておひなさまは旧暦で祝う、ということだった。異なる暦が生活のなかに浸透していること、町家が特別なものではなく、自然の変化を楽しむながら暮らすことが当たり前のことなのだと感じた。

節分とは言わず「お年越し」という言い方があることも知った。お正月とは異なる大切な節目なのだ。立春を迎える神妙な心持が窺える。「鬼は外！」と有名人が寺社で豆まきをする程度の感覚だったのだが（ちなみに阪急沿線ではタカラジェンヌが豆をまくお寺がある）、むしろ厄払いとして、星祭という名前で年回りと深く関わっていることも知った。

巻き寿司を食べる習慣が関西で広まり（私が幼い頃にはない習慣だった）、恵方という言葉は知っていたが、行事と関連してただけで、その重要性をあまりわかっていなかった。かつては町家に普通にあったらしい歳徳さんを説明する時、わざわざ恵方巻に言及するという方もあった。本当は逆で、新しい時が訪れる方角が年越しのなかで強く認識されているのだった。

以来、私は初詣よりも厳粛な気持ちで年越しを迎えるためにお参りするようになった。早めに帰宅し、寒い夜道を歩いていく。お寺の周辺だけが賑やかになり、ホッとしながら、門前で焙烙を求め、用意されている筆で、家内安全とか無病息災とか書き、自分や家族の年齢を書く。これらは壬生狂言の焙烙割りでガラガラと音を立てて厄をはらってくれるのだ。新しい年のために清められる感覚。お参りをすませると憑き物が落ちたようにさっぱりとした気分になる。さあ今年もがんばろうと思う。

「お化け」という習慣も興味深い。昨今のハロウィンなどに倣う必要などなく、古い年を忘れる行事としてこれこそとりいれればよいのに、と思う。

この頃、確かに雪が降る。吉田神社の参道が雪で埋まるなか、試験の時間をめがけて走ったこともあった。中学受験の日も雪が舞っていた。そしておひなさまの頃も大学入試の日程と重なり、私の気持ちの中では節分と同じくらい雪の思い出になっている。受験室の換気扇がバタバタとうるさいので、ふと窓を見ると数十メートルしか離れていないはずの時計台が雪で見えない。合格したら恐ろしく寒いところで学ぶのだ、と集中力がぶつつり切れた自分に愕然としたが、この光景は鮮明に残っている。

だから旧暦でおひなさまをお祝いするというのは、暖かく明るくなった家で祝うという、きわめて合理的なことなのだ。古いしきたりを守るのではない。理にかなっているから続けられている。年中行事が面倒なきまりごとではなく、ごく自然に先人が積み重ねて来た知恵であることがよくわかる。華やかな女の子のお節句、せめて明るい気持ちで祝いたい、そんな優しい家族の思いも感じられる。

町家の庭には花の咲くものが少ない、とも聞いた。春を告げるさまざまな花は、座敷からは直接見えないところに植えられている。花壇の花も人目につかないところで暖かくなるのを待っている。多くの人の目には触れないけれども住み手にとってとても大切な明るく開けた空間が町家の奥にある。そのことをうれしそうに語ってくださった小島正子さんの笑顔が忘れられない。

今年の冬のように雪が多いと、春を待つ気持ちが一層強いことだろう。町家を取り囲む建物がどんどん変わり、このような明るさを味わう空間が変わっている。歳時記とともにある生活を私たちがもっと身近に感じていけば、目の利益を追った建て替えや効率優先の建てつまりにはならないと思うのだが。このところ、再び節季に着目した読み物が増えている。行事や食べ物だけで伝統をつないでいても、それらを包み込む空間がなければ、単なるしきたりや知識になってしまうだけだろう。いつまでも自然をとりこむ都市であることを願いつつ、今年も静かに春を待つ。

<丹羽 結花（京町家再生研究会 事務局）>

報告◎京町家友の会例会

<11月度 奈良屋記念杉本家保存会「杉本家住宅」>

11月22日、雨が降りそうで降らない、秋にしては暖かい日曜の午後に、総勢17名で奈良屋記念杉本家保存会「杉本家住宅」さんをお訪ねしました。京町家友の会と杉本家住宅さんは長いお付き合いではありますが、久しぶりの訪問とあって、懐かしさと新しい発見のある、楽しい一日となりました。当日は、杉本歌子さんがお迎えくださり、時間をかけてゆっくりと案内をしてくださいました。独特の色合いの土壁が醸し出す座敷の陰影の美しさ、ハレとケの使い分けの意味の深さなど、歌子さんの趣のある言葉での説明は、まるで町家の声を翻訳していただいているかのようで、心の深いところに落ちていくような感じがしました。

「建物だけでなく、そこで営まれる日々の暮らしの話と共に伝えることが、京町家としての意味」という歌子さんのお言葉は、京町家をこれからも守り伝えていきたい京町家友の会にとっても大切なものだと思います。「またお訪ねします。また季節を変えて」と会員さんが弾んだ声で歌子さんにお声をかけていらしたのも印象的でした。ぜひ京町家友の会でも再訪を企画したいと思います。

<12月度 吉田山荘 カフェ「真古館」>

12月9日の午後、東山三十六峰の一つの吉田山に位置する吉田山荘のカフェ「真古館」でコーヒーとケーキのティータイムを会員の方々と楽しみました。吉田山荘は昭和七年に昭和天皇の義理の弟君、東伏見宮家の別邸として建てられた建物をそのまま利用した料理旅館です。今回訪問した「真古館」は、そのお屋敷の車寄せであった建物を改装して作られたかわいらしい洋館のカフェで、窓からは比叡山、大文字、街の景色などを見渡せる隠れ家のような場所でした。お店の方に真古館のお話を伺い、吉田山荘のお庭の散策をさせていただきました。名残の紅葉が少しある山々を眺めながら、楽しいひと時を過ごすことができました。

<1月度 祇園・新門前通西之町地区まちあるきと

八坂神社正式参拝>

1月14日は、雪が舞い散る中、京町家再生研と合同で、祇園の新門前通西之町地区をまちあるきし、八坂神社を正式参拝しました。新門前通西之町地区は京舞井上流のお家元（片山家能楽・京舞保存財団）がある地区です。この地

区では、「町式目（みんなで守るルール）」として「祇園縄手・新門前歴史的景観保全修景地区」、「新門前通西之町地区地区計画」、「地域景観づくり協議会」の指定・認定を誇りに持つことを掲げ、地区の修景に取り組んでおられることを視察しました。地区内の京都市広報板だけでなく、家の壁にも積極的に町式目を貼りだして、地区住民が真摯に取り組んでおられることがよくわかりました。その後、八坂神社を正式参拝し、今年一年が京町家ネットおよび全会員の皆さまにとって良き年であるように、八坂の神様に新年のご挨拶をさせていただきました。皆さま、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

<惣司 めぐみ（京町家友の会 事務局）>

（写真：野村写真事務所 野村 浩二）



改修事例◎天狼院書店

東山区

設計：株式会社クカニア／末川協建築設計事務所 / 施工：アラキ工務店

ちょうど一年前の今頃、事務局に若い女性から連絡があったという。依頼者は「天狼院書店」。東京・福岡に次ぐ三店舗目を京都に計画、すでに物件も決めて賃貸契約を済ませておられ、夏頃オープンしたいというお話だった。

当時、私たち作事組でご相談を受けた印象では、町家の基幹改修を主とする作事組の方針と店子である依頼者の要望が合致するのかどうか、所有者である大家さんがその工事に対してどこまで費用や責任を持ってくれるのか、テナントの内装工事に作事組が見合うのか、ご要望に添えそうにない工期をどこまで許容してもらえるのか…など憂慮する点が多く、依頼者がいる東京とここ京都との距離感と同様の隔たりがあったように感じる。

おそらくその数日後、初めてお会いした店主は、一目見て事務局である釜座町家を気に入ったとのこと。京都は創業当時の肝入り店舗で、開店時期を延ばしても本物にこだわりたいとお話されるその姿勢と伝わってくる前向きな人柄は頼もしかったが、一般的には大家さんが行うことの多い主要構造に関わる工事も全て自ら負担するというその判断に、ご説明が足りないのだろうか…と不安も消えないままだった。

計画する店舗は一風変わった書店で、本屋にカフェを併設し、和室は「こたつのある本屋」として残したいとのこと。2階はセミナーイベントなども行う多目的な場としても利用し、イベントで撮った写真を飾るギャラリーを設けたり、映像設備を導入して国内に点在する3店舗を同時中継して交流を図るなど、「本の先にある体験までを提供する次世代型書店」がコンセプトだった。

設計者としては、利用方法を限定しない流動的な運営スタイルの全容が掴みづらく、空間のボリュームや設備のスペックを決定するのに苦労したが、基本部分から手を入れる、町家の原型復元を目指す、書店とイベントなど多目的な要素を許容できる空間とする、など計画の方針も徐々に共有でき、私たちの思いもご理解いただいていると感じるようになっていった。

躯体改修に関する工事区分については大家さんともお話しいただいたが、「工事内容は容認するが費用は店子持ちで」とのことだった。調査に入って既存建物を確認した上で、傷んでいる構造部分は改修する、まだ使えそうなカラーベスト葺の大屋根については既存のまま使用することにした。工期、予算ともに前例の店舗からは想定外だったはずだが、「本年度は京都店に懸ける！」と、全てを肯定的に受け入れてくださる店主の懐の深さや、楽しんで仕事に向かう姿勢にとっても刺激を受けた現場だった。

改修する町家は一列3室型で間口3間奥行6間、総二階のカシキ造り。比較的しっかりした造りで、大きな狂いもなく健全だったが、樋樋からの漏水が原因か、ハシリニワ奥の南東

角隅柱が大きく下がっていたため、火袋の通りで妻壁に向けて沈みが見られた。工事ではその妻壁の通りをメインに、部分的に表の柱などもジャッキアップした。土壁もしっかりしており、揚げ前による亀裂もほぼ見られなかった。

表のミセノマは、道路際まで拡張したシャッター付のガレージに改修されており、ガレージ内部やナカノマの天井もボードが張られていたが、人見梁と見られる梁型は確認できたので、内装を撤去し本来の外壁面に戻して外観を復旧することにした。解体後、残っているかと思われた表庇の先端が撤去されていた事が判明し、追加工事となったが表庇を新調し、金属葺の予定だった仕上も店主と再検討して瓦葺に変更した。

離れにあった既存の風呂などは撤去し、ハシリニワには軽食提供のための必要最低限の厨房設備を新設。厨房やトイレなど水回りの位置は変更していないため、調査の上、使える配管は再度利用した。ボリュームの少なくなった給排水設備に引き換え、電気設備は動力も新たに引き込み、アイスクリームメーカーやエスプレッソマシン、オーディオ機器など店舗としてのニーズに応えた。

工事中、前栽の心地良さや写真映えする佇まいに感銘を受けた店主からのリクエストで、縁側の先に造り付のベンチシートも追加した。庭や座敷を生かした京都店の目玉の一つになるだろうと言う。

かくして、当初夏予定だった竣工は秋を過ぎて年明けになったが、店主が「京都の職人さんたちとともに総力を結集して創り上げた」と言う京都天狼院が1月27日にオープンした。場所は大和大路団栗下がる西側。ようやく全容を掴めた私の印象は、本をベースに派生した興味や趣味までも実現してくれる大人の遊び場だ。読むだけに留まらない「本の先にある体験」をのぞいてみたい方は是非。

<南 麻衣子（京町家作事組）>



胡乱座 (Uronza, traditional Kyoto-style House) は静かに過ごしたい人に適した宿である。家の前に到着すると、あるじ A の大橋さんが気配を察して出迎えてくださった。中へ入るとトオリニワに宿泊客の物と思われるカラフルなスーツケースが二つ置かれている。

お座敷の前に掲げられた扁額は、大徳寺の名僧が揮毫された書で格調が高く、辞書にある胡乱座という言葉の意味と宿の名前にこめられた意味を考えながら、できるだけ自然に書の下をくぐって庭に面したお座敷に座った。冬の弱い光がうっすらと差し込み、机の隅にある木彫の小品にも陽のぬくみを感じられる。

「時々こういうものも作っています。」

「可愛らしい。なめらかで…何のかたちでしょう、これは人魂ですか」

「ナメクジです。庭の工事の後うじゃうじゃとナメクジが出てきてビックリ。ありきたりを好まない妻 (あるじ B) が『宿のマスコットはこれだ』と決めました。」

ナメクジ。そう言われると名刺にも HP にもカラフルなのが踊っている。表の郵便にはりついてたのも、のれんに白く染め抜かれた滴のような生き物もナメクジだった (@_@)！私は大橋さんに向き合うと、昔ナメクジに塩をかけたことがありますと懺悔をせずにはいられなくなった。大橋さんもナメクジが好きなわけではないと仰る。考えてみるとそれは供養なのかもしれない。

懺悔してしまうと気が楽になり、ここでは紹介できない面白いお話も伺った。烏羽玉とお薄のおもてなし、柔和なナメクジ、お家を隈なく案内してくださったときには流石の立ち居振る舞いで勿体ないほど安らぎを与えてくださった。「あるじ A はそれなりに親切ですが、あまり愛想が良い方ではありませんので、あらかじめお詫び申し上げます」というホームページの自己紹介文が可笑しみ深く、町家の魅力について寄せてくださった文章は多分に思索的。これから数回に分けて連載させていただきます。

● 町家との馴れ初め—消費社会に抗って

それは 15 年前の話である。その時ももうすでに「町家でナントカ」という本も何冊か出版され町家ブームはスタートしていた。しかし私と妻は「町家」というものはどういうものかということはほとんど知らなかった。『鰻の寝床』『夏は暑くて、冬は寒い』とよく耳にする言葉くらいの知識しかなく、実際に見たことも体験したこともなかった。

さらに話は遡る。使い捨てや直して使うより新しく買い替える方が安いなどという現代の消費社会に辟易していた二人は旅に出ることを企てていた。そして旅から戻ったら何をするかを話し合った結果、まとまった意見がゲストハウスの運営であった。2001 年から 2002 年にかけては、東京や沖縄にゲストハウスというものが出現し始めたところで、京都で「京町家を謳ったゲストハウス」はまだ数軒ほどだった。

最初から町家を探していたわけではない、物件を探しているうちに一軒の町家に出会い、その佇まい、空気、新しいものにはない深みに触れ、この伝統的な建物を直してゲストハ

ウスにしたら面白そうと思ったのだ。

もともと二人とも新しいものよりは古いもの、買い替えよりはリサイクルやリメイクをモットーにしていた。調べれば調べるほど町家は面白かった。自然素材で作られていること、解体してでた建材は捨てるのではなく使えるものはリサイクルして使っていること、家族や地域とのあり方、建築技術、京都の気候や文化に沿った建築様式など。知れば知るほど、町家でゲストハウスをオープンさせて、その面白さがゲストに伝わればいいと思うようになった。

● 作事組と出会う

予算的な問題もあり、最初はできるだけ安く直してほしいと「安くやりまっせ工務店」に見積もりを依頼した。しかし待てど暮らせど見積りの返答はなく、痺れを切らせて問い合わせると「直してもそのあとの保証はできない。壊して新しくする方が早くて安いですよ」の返事。町家を直して使うことは無理なのかと頭を抱えた。安いということはどういうことなのか今なら分かる。それは家でさえ「建て替え」という名の「使い捨て」を意味する。そして直すには技術も時間も費用もかかるということなのである。しかし、当時は「安いこと」に未練があった。

「これ、なんて読むんだろう？つくりごとぐみ、さじぐみ、さごとぐみ…」インターネットで町家を探している時に見つけたホームページ「京町家作事組」。作事 (さくじ) というのが「家屋などを造ったり修理したりすること。普請 (ふしん) 建築。『広辞苑』)」という意味だと知ったのは、それからずっと後のことだった。どうやら町家の改修工事についてはここに聞けばいいらしい。我々は「安いこと」という呪縛から逃れようと、その作事組に助けを求めた。そして当時の事務局長田中さんの「大丈夫ですよ」に安心し、もう 100 年住めるように改修するというコンセプトに我々は目を輝かせたのであった。

● 胡乱座開業—すべては長期旅行のために？

ちょうどその頃、同業の布屋さんが作事組で改修工事をされ (しかも設計担当が同じ)、華やかに開店された。その布屋さんの開業を横目に、我々は改修した町家を友人に託し、本来の目的であったブランクのない長期の旅に出た (バックパッカーと呼ばれる人たちの旅のスタイルである)。ユーラシア大陸を横断し、モロッコに渡り最後はシベリア鉄道の列車に揺られながら帰路に着いた。20 ヶ月の月日が流れていた。(フェリーで富山港に降り立ち、まず驚いたのが日本の物の多さと鈍行列車の速さだった。) 帰宅した町家は友人たちに守られ無事であった。開業には追加工事が必要だったが、布屋さんが開業の前例を作ってくれていたこと、ゲストハウス自体がまだ少なかったこともあり、行政の審査は滞ることなく済み開業に至った。(それでも営業許可取得までには 2 か月ほどかかった。)

(文：胡乱座あるじ A 大橋英文)

(取材・構成：京町家作事組事務局 森珠恵)

interview — 京町家に移り住んで ● あけびわ路地 ウォーリン、ドゥルー ケント邸

聞き手：岩本 純一（丸吉住宅）

● 京町家を住まいに選ばれた理由

京都に4年、日本には8年程住んでいます。

京都の大学に通っているときに、京町家に出会い「京町家に一目惚れ」しました。

カナダにはない、天然素材を使用した木造住宅に強い関心を持ち、京都大学の高田研究室で京町家の勉強をしました。通庭や坪庭、内・外との空間のあいまいさにも惹かれました。

海外企業に就職し、日本の活動拠点として当初東京で不動産を探していましたが、東京はオフィスと住まいが分断されている不動産が多くイメージが合いませんでした。そこで大学時代の高田研究室に相談をしたところ「あけびわ路地」に出会いました。

オーナーの人柄、改修前オフィスにも対応したデザインに施工いただいた大下工務店の技術や町並み（路地も好き）も大変気に入りました。

京都の文化や京町家の職住共存空間も町家を選んだ理由の一つです。

● 地域とのつながりは？

オーナーも近くにお住まいで、入居した時に町内の方たちへの挨拶にもオーナーと一緒にまわって頂きました。感謝しています。

町の人たちは、皆顔を合わすと「こんにちは」「こんばんは」と挨拶を交わしあっているのをみて、地域のつながりの深さを感じます。

オーナーから地域イベントの招待をうけ、積極的にイベント参加することにより、最初は、観光客？（ただの身長180cmの外人）として見られていたような感じも受けましたが、徐々に町内会の方とのつながりも深くなってきました。

これからも積極的に地域のイベントに参加したいです。

● 実際に京町家にお住まいされていかがですか

春と秋の住み心地は完璧です。

夏は、2階暑いので1階で寝ることも有ります。エアコンは1階のみ、2階は扇風機だけで過ごしています。

冬は、子供のころから寒い部屋（カナダも寒い）で寝ることが好きです。京町家の寒さは快適です。

京町家は、クラウドのよう。

京町家があり、隣家があり、町内があり、地域があり、色々なつながりで形成されている。良い意味であいまいな「私」・「公」のつながりで造られている感じがします。

唯一困った点は、蚊（モスキート）が多く、今年の夏は「網戸」で対策を考えています。

● これから京町家に住まわれる、外国人へのアドバイスをお願いします

趣や美的な物理的な部分だけを京町家に求めるのではなく、地域コミュニティや文化も含めた住まい方を学ぶことも必要でしょう。

外国は、プライベートとパブリックスペースがはっきりしているので、京町家のもつ内（プライベート）、外（パブリック）のつながりや空間のあいまいさを感じ、「自分の家だから自分の好き勝手に住もう。」ではなく、「周りの事も考えて住もう。」という事も大切だと感じました。

特に購入される方は、1年程度「ためし住み」してみることも良いのでは？



● 事務局覚え書き

3月8日を「町家の日」と制定させていただきました。町家の中に蓄積されてきた暮らしと建物の知恵や工夫を再認識し、町家の伝統的価値とその素晴らしさを多くの人に広め、町家の保全と再生を図ることを目的としています。この日は全国にある町家で自由に、町家でイベントや町家についての催しを行っていただき、楽しく広めていけたらと思っています。全国の町家にお住まいの方、町家関係者の皆様、ご協力をお願い致します。

< 京町家情報センター事務局 城幸央 >

オーナー登録数：延222

ユーザー登録数：延1602

物件登録数：延1615

成約件数：延204

（2017年2月1日現在）